

[課題演習報告]

若年層高校教員の対生徒関係における社会的能力向上の取組 —若年教員研修プログラムの実践—

羽 原 優 一

Yuichi HABARA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
福岡県立福岡中央高等学校

(2022年1月12日受理)

本研究では、教師に求められる社会的能力を学ぶ学習である「教師のための8つの社会的能力育成をめざした社会性と情動の学習」(Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers, 以下, SEL-8T)を取り入れ, 高等学校の若年教員の対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる研修プログラムを策定し, 効果を検証することを目的とし, 研修を実施した。研究Ⅰでは6回のセッションを実施し, 自己評価, 他者評価の結果から, 若年層教員の社会的能力を向上させるための一助となった可能性が考えられた。研究Ⅱでは, 2つの群に対して, 時期をずらしてそれぞれ6回のセッションを実施した。その結果, 前期実施群と後期実施群ともに, 「他者への気づき」について, 有意に上昇していることが認められた。自己評価, 他者評価の結果から, この研修プログラムが若年層教員の社会的能力を向上させるための一助となったことが示された。

キーワード: 若年教員研修, 社会的能力向上, 若年層高校教員, SEL-8T, 対生徒関係

1 問題と目的

(1) 主題設定の理由

ア 在籍校の実態から

在籍校は全校生徒約 1080 名在籍の全日制普通科高等学校である。そのうち, 9割以上が4年制大学へ進学するため, 進学への意識が非常に高い。生徒の中には部活動と学業の両立に悩み, 一人で悩みを抱えてしまうケースが多い。月に一度のスクールカウンセリングは希望者が多く, 予約が埋まって, 受けた生徒が受けられない状況がよくあり, 担任や教科担当など生徒と密に関わる教員の生徒と関わる力を高めておくことが求められている。進学校においては, 教科指導力も問われ, 経験の浅い若年層教員に大きな負担が掛かっている。校務分掌の業務もあり, 勤務過多となる状況が生まれている。そのような状況において, 対生徒関係の構築やアプローチなどについての悩みが多いという状況となっている。そこで, 本校の課題を解決するためには, 若年層教員自身が, 対生

徒関係において必要な能力に気づき, それを伸ばすことのできる環境を整備することが必要であると考えた。

イ 在籍校での若年教員研修の実態から

私自身, 在籍校で 10 年前に若年教員研修を受けたが, 日々の業務に追われ, 多忙を極めた。また, 2年目以降は担任, 校務分掌, 部活動顧問などの業務がさらに増えていき余裕がなくなっていた。そこで, 今後若年層教員に対するフォローアップ体制を学校として構築し, 教員にとって持続可能な勤務環境を整えていく一助にしたいと考えた。

ウ 社会の要請から

「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」(2019 中教審答申)の中で, 「特に長時間勤務の傾向がある若手教師については, 学校組織全体の中で支えていくことが重要である。」とあるように, 学校が組織として若年層教員を支援すべきであると提言している。

(2) 研究主題の意味

「若年層高校教員」とは、概ね年齢が30代前半までで教職経験年数10年以内の教員とする。「対生徒関係における社会的能力」については、以下に示す「社会性と情動の能力」を指している。

若年層教員が学習指導や生徒指導、学級経営を適切に行うためには、児童生徒の話を聞いたり児童生徒に話をしたりしながらその長所や短所に気づき、自らの感情をコントロールしつつ、状況に応じた適切な関わり方をする必要がある。こうした関わり方に関する能力が社会性と情動の能力 (Social and Emotional Competence, 以下, SEC) であり、これを高める学習が、社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning, 以下, SEL) と呼ばれている。

これまでの教育実践と研究の中で、山下・小泉 (2012) は、教員の社会的能力の育成に関する取組として SEL に注目し、まず教員の社会的能力を測定するための「教員の社会的能力尺度」を作成した。ここでの社会的能力は、適切な自己・他者・状況認知をもとに、自己の情動と行動をコントロールし、周囲の人々や集団との良好な関係や関わりをもつ力を意味する。調査の結果、教員が自分の身についていると考える社会的能力は、教職経

験年数の長短とはあまり関係がないことと、社会的能力が高いと自己評価する教員は、教科指導や学級経営等の日常の指導力も高いと自己評価していることが明らかになった。

(3) 教員育成指標との関係

本研究では、SEL-8T (Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers) は、教師に求められる8つの社会的能力 (表1) を身につける学習である。すなわち、基礎的な社会的能力として「自己への気づき」、「他者への気づき」、「自己のコントロール」、「対人関係」、「責任ある意思決定」の5つ、そしてこれらを基盤とした応用的な社会的能力として「生活上の問題防止のスキル」、「人生の重要事態に対処する能力」、「積極的、貢献的な奉仕活動」の3つがあり、全部で8つの社会的能力から成り立っている。

県立学校教員育成指標と SEL-8T の関連について、どの育成指標がどの能力に該当するかをまとめ、今回の研修が教員育成指標に示された能力を向上させる内容であることを示した (表2)。

(4) 研究の目標

対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる研修プログラムの効果を検証し、高等学校の若年教員研修で利用できる研修の手引きを作成

表1 SEL-8Tで育成を図る社会的能力 (小泉, 2014)

能力区分	能力番号	社会的能力
基礎的社会的能力	F1	自己への気づき
	F2	他者への気づき
	F3	自己のコントロール
	F4	対人関係
	F5	責任ある意思決定
応用的社会的能力	F6	生活上の問題防止のスキル
	F7	人生の重要事態に対処する能力
	F8	積極的・貢献的な奉仕活動

表3 研修スケジュール (研究 I)

日付	内容
9/18 (金)	研修① B 自己・他者への気づき、聞く
10/9 (金)	研修② C 伝える
10/23 (金)	研修③ D 関係づくり
10/28 (木)	研修④ E ストレスマネジメント
11/12 (木)	研修⑤ G 環境変化への対処
12/4 (金)	研修⑥ 全体の振り返り

表4 セッション (50分) の流れ

展開	実施内容	時間
導入	研究者による理論の説明	5分
展開①	研究者によるモデリング	10分
展開②	若年層教員の模擬授業	15分
展開③	意見交換	15分
終末	振り返り・アンケート記入	5分

表2 SEL-8Tで育成を図る社会的能力と県立学校教員育成指標の関連表

研修内容	SEL-8Tにおける社会的能力	SEL-8Tの学習領域: 主テーマとその概要	育成指標【基礎・向上段階(教諭)】
第1回 ストレス マネジメント	自己のコントロール	A 時間管理: 教育現場において、法律等で定められた勤務時間や授業時数などについての理解が必要である。	● 教育公務員に求められる基礎的な能力「法令遵守」「事務処理」 ● 教育公務員の使命と責任「使命感と熱意」 ● 学習指導と評価の力「授業評価と改善」
	生活上の問題防止のスキル	E ストレス対処: スレッサーに対応することで、円滑な教育活動が運営できることにつながり、生徒に信頼されるため。	
	責任ある意思決定	F 健康管理: 教育を自己の健康状態が安定していないと、交通事故や冷静な判断が出来ない行動に繋がる能力である。	
	人生の重要事態に対処する能力	G 就職・異動・昇任: 教員として避けて通れない変化に対応する能力が必要となる。	
第2回 サポート 希求	自己への気づき	E ストレス認知: 授業が思い通りにならない等の場合に掛かるストレスを認知していく必要がある。	● 連携・協働力「学校組織の理解と参画」「自己啓発・人材育成」
	対人関係	D 協力関係: 学校の組織の中で働いていく上で必要なスキルである。	
	自己への気づき	B 自己理解(感情、対人関係能力、教職能力): 自己研鑽、研究と修養を図る際に自己理解が不可欠であるため。	
	人生の重要事態に対処する能力	F 援助要請: 危険を察知し、すぐに助けを求めるスキルが必要であるため。	
第3回 あいさつ	積極的、貢献的な奉仕活動	H 職場・家庭・地域でのボランティア: 教員として必要なボランティア精神を学ぶ必要があるため。	● 連携・協働力「危機管理」「保護者、地域等との連携」
	生活上の問題防止のスキル	A 整理整頓: 危険を予防するために必要なスキルであるため。	
	他者への気づき	A 挨拶: 保護者との関わりの中で最初の挨拶が最も重要なスキルとなるため。	
	積極的、貢献的な奉仕活動	C 感情伝達意思伝達: 保護者対応において、こちらの意図を正確に伝えなければならないため。	
第4回 伝える	対人関係	D 非言語的コミュニケーション: 言語以外の部分で相手に与える影響が大きいことを理解した上で保護者等に対応すべきであるため。	● 学習指導と評価の力「授業構想授業展開」 ● 生徒指導と集団づくりの力「指導・支援」
	責任ある意思決定	F 意思決定: 授業を形作る際に、様々な情報から自分の意思で決断する力が必要となるため。	
	他者への気づき	B 感情についての理解: 指導・支援していく際に、感情の動きについて理解しておくことで適切な対応が可能になるため。	
	生活上の問題防止のスキル	D 問題解決: 様々な問題に対応するスキルが必要となるため。	
第5回 面談・聴き方	自己への気づき	E ストレス対処: 指導する場合に、大きな責任が掛かる場合が多いため。	● 生徒指導と集団づくりの力「児童生徒理解」
	対人関係	D 問題解決: 様々な問題に対応するスキルが必要となるため。	
	他者への気づき	B 他者理解(感情、立場): 児童の立場に立つて対峙する能力が必要であるため。	
	対人関係	D 関係開始: 生徒との関係構築の際に必要なスキルを身に付けなければならないため。	
	責任ある意思決定	F 精神衛生: 使命感に燃えすぎて自身の心のバランス感覚が大切になるため。	
	自己への気づき	C 感情のコントロール: 教師としての使命感や熱意だけでなく、冷静な判断をして行動するために必要な力であるから。	

※ SEL-8Tの学習領域: A 基本的な生活習慣 B 自己・他者への気づき、聞く C 伝える D 関係づくり E ストレスマネジメント F 問題防止 G 環境変化への対応 H ボランティア

することを目標とする。

2 研究 I

(1) 目的

初任者の対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる若年教員研修プログラムを策定して試行し、効果を検証すること。

(2) 研究方法

研究期間

令和2年6月～令和3年2月

研究対象

令和2年度初任者研修教員3名（数学、英語、体育）（実施群）と若年層教員3名（統制群）

手続き

対生徒関係における社会的能力向上のための研修内容とスケジュールは、表3の通りであり、各セクションは表4の流れで実施した。

効果測定

(a) 教職能力についての自己評価尺度：教師用 SEL-8T 尺度(山田・小泉・高松, 2014)を用いる。これは、内容の妥当性と信頼性が確認されており、「私は、教師として自分の得意なことと不得意なことが分かっている。」などの26の質問項目に対して「5：当てはまる」から「1：当てはまらない」の5件法で研修実施前、実施後の計2回実施した。なお、「研究協力同意書」の中で、プライバシーを保護すること、研究において実施した評価が業績評価等の公務上の評価に直接的に影響することがないようにすることなどを記載し、配慮して、実施した。

(b) 生徒による評価：「授業中に生徒が活動したり話し合ったりする機会がありますか」等の教員の指導力に関する内容で、全校一斉の授業アンケートの項目を用いて、生徒による教師の授業評価を研修実施前、実施後の計2回実施した。回答結果は成績や評価には反映させないことを伝えた。

(c) 指導教員による評価：(a)と同様の項目で指導教員に、研修実施前、実施後の計2回実施した。

実践の具体的内容

校内における一般研修の時間を活用して、プログラムを実施した。

(a) 第1回「自己・他者への気づき、聞く」：9月18日（金）13：15～14：00に実施した。報告者による理論の説明、気づきや聞くことに関する模擬授業（モデリング）、若年層教員の模擬授業の順に実施し、最後にアンケートを実施した。一人の教員は「自分の今後にも役に立つし、生徒にも聴かせてあげたい内容だった。」と記述しており、前向

きに研修に臨む姿勢が見られた。

(b) 第2回「伝える」：10月9日（金）10：00～10：50に実施した。電話対応についての模擬対応を実施した。「より練習を積んでいきたい」と対象の若年層教員が前向きな姿勢を見せた。

(c) 第3回「関係づくり」：10月23日（金）13：35～14：25に実施した。伝え方のポイントや話の一貫性などの話をして、保護者対応の模擬演習を行った。「学級内ではなく部活動や自身の話し方を振り返るといった意味でも重要だと再認識できた」

「保護者や外部との電話連絡の際は、特に言葉遣いや話の組み立てを考えています。」といった振り返りが書かれていた。「今回学んだ内容を実際に生徒に伝える場面設定が出来るとすれば、どんな場面を想定するか」という問いに対しては、「どんな言語でも一緒であるということも踏まえて英作文、スピーキングの授業・指導」「保健や体育の授業中にグループで話し合う場面を想定し、伝えられる。」

「SHR では進路について話が出来る。総合的な探究の時間では SDGs のグループ発表の際のポイントとして「伝え方」を話せる。」というように、前回と比較しても実際の指導の場面に生かすことができるように意識するようになった。

(d) 第4回「ストレスマネジメント」：10月28日（水）13：35～14：25に実施した。主にストレスの対処法についての模擬授業を行った。「生徒に話をするとき、『ここだけは印象に残したい』というところは伝え方を考えて話をしたい」「生徒には何かあったら相談する、本人に直接話をするように伝えていくことを徹底させたい。」といった振り返りが書かれていた。「今回学んだ内容を実際に生徒に伝える場面設定が出来るとすれば、どんな場面を想定するか」という問いに対しては、「保健の授業の中で「ストレス対処」に関連する単元があるので、そこで今回学んだことを取り入れていきたい」「SHRやテスト返却時、授業の導入(Short talk)で取り入れていきたい」という具体的で前向きな感想や意見が得られるようになった。

(e) 第5回「環境変化への対処」：11月12日（木）9：00～9：50に実施した。主に三者面談における対応について、模擬演習を交えて実施した。「実際に面談をロールプレイできて勉強になりました。いいところ探しは、3年生に実施してみたい」「進路に関する内容は、慎重に考え、言葉を選ばなければならない」という感想があった。「部活動や個人面談」「担任として話をするとき」というようにより具体的な指導の場面をイメージして研修を実施できた。

(e) 第6回「全体の振り返り」: 12月4日(金) 13:35~15:25 に実施した。振り返りの時間(強化の時間)として、5回の研修の中での自分の模擬授業や会話を全員で動画を見ながら振り返ることで、自身の成長を感じる場面設定をした。動画を見て、総括アンケートを実施し、学んだ内容と実際の若年層教員自身の指導を振り返ることで、より効果的な研修となるような工夫をした。自由記述や5件法の評価で、研修内容や理解度についてアンケートを実施した。また、今後の研修内容のニーズについても、必要な研修項目を選ぶようにした。じっくりと自身の成長について考えを深められるように促すことができ、効果的な研修を実施できた。また、統制群も含めて全対象者の教員アンケートを実施し、回収した。

(3) 結果と考察

(a) 教職能力についての自己評価: 教師用 SEL-8T 尺度の8つの能力において実施群と統制群の平均値を比較した。自己評価においては、実施群は概ね全ての能力において数値が上昇していた。統制群は上昇している能力もあるが、下降している能力もある。このことから、研修中での取り組みにおいて、若年層教員の社会的能力が向上したという認識があることが分かる(図1)。

(b) 生徒による評価: 授業アンケートの6つの質問項目について、群(2)×時期(2)の分散分析を行った。図2に示すように、授業中の生徒の活動や話し合いの活動の機会の設定頻度に関する質問では、実施群が有意に上昇しており、統制群は変化がほぼ無いことから、実施群の若年層教員は生徒に活動や話し合いなどを意識的に設定するよう変容したことが読み取れる。その他の質問については、統制群が実施群よりも教職経験があり、生徒の状況に応じた授業を展開できており、生徒の授業に対する評価が高くなっている可能性が考えられる。

(c) 指導教員による評価: 実施群について、指導教員による評価は概ね全ての能力で上昇していた。教科指導においても、若年層教員の社会的能力が上がったという評価が見受けられた(図3)。

若年層教員の感想を見ると、前向きに研修に取り組んでおり、振り返りの中の記述を見ると、部活動、授業、面談などの場面で使いたいという意識が芽生えてきた。若年教員の知識面は向上しているが、まだ実行に移せておらず、本当の意味で身につけていないと考えられる。実際に使うことを意識させて研修していくことが必要である。

(4) 研究1のまとめ

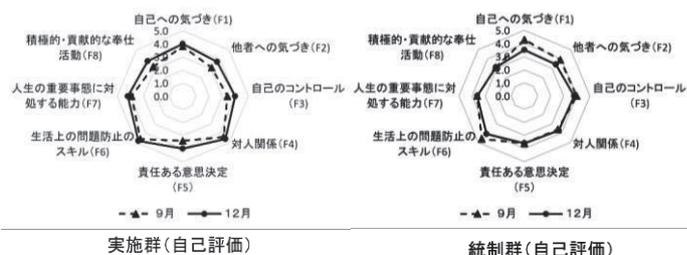


図1 教職能力についてのアンケート結果

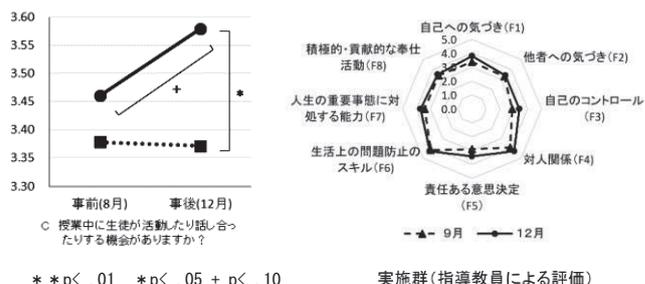


図2 生徒による評価アンケート結果 図3 指導教員によるアンケート結果

* * $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる若年教員研修プログラムを策定し、初任者3名に試行した。その結果、自己評価、他者評価の結果から、若年層教員の社会的能力を向上させるための一助となった可能性が考えられた。

3 研究II

(1) 目的

研究Iの研修プログラムを改訂して実施し、その効果を検証して、高等学校の若年教員研修で利用できる研修の手引きを作成すること。

(2) 研究方法

研究期間

令和3年5月~令和3年12月

研究対象

前期実施群(A 高校)及び後期実施群(B 高校)の若年教員各10名程度

実施内容

研究期間の前半(5~7月)に前期実施群で実施し、後半(8~12月)に後期実施群で実施した(表5)。研修内容はどちらも同じで、モデリングの様子を映像化し、研修資料を電子化することにより、研修の汎用性を高めた。また、資料をパッケージ化し、研修の振り返りがしやすい形にして、若年層教員の成長に寄与する内容とした。

研修テーマは、①ストレスマネジメント、②サポート希求、③あいさつ、④伝える、⑤面談・聴き方、⑥研修の振り返りとした。研修では、プレゼンテーションを示しながら内容を伝え、講義形式に加えて、実践を多く取り入れ、アウトプット

の機会を増やした。また、教育活動の中で、実践するように促していくことで、対生徒関係における社会的能力向上を目指した。若年層教員それぞれの経験、能力、適性に応じて研修を受けることができるよう、事前事後のフォローを丁寧に行った。具体的には、個別の面談、電子メール等での質問や相談を受ける等の個別的な対応をした。

測定内容と測定方法

- (a) 教職能力についての自己評価：研究Ⅰに同じ。
- (b) 生徒による評価：授業アンケートの項目を用いて、生徒による教師の評価を計4回実施した。本研究に関連する3つの質問項目（4件法）のみを抽出し分析した。
- (c) 指導教員による評価：研究Ⅰに同じ。
- (d) 研修の振り返り：全6回の研修後に研修内容について、自由記述と5件法でアンケートを実施した。

SEL-8T の具体的実践内容

前期実施群、後期実施群ともに一般研修の時間を活用した。

- (a) 第1回「ストレスマネジメント」：報告者による理論の説明、モデリング、若年層教員の模擬授業の順に実施し、最後にアンケートを実施した。研修後に「生徒に対する言葉遣いは敬語か？砕けた言葉か？」という対生徒関係における具体的な質問が出るなど、前向きに研修に参加する姿勢が読み取れた。
- (b) 第2回「サポート希求」：周囲への助けの求め方について、模擬授業等を実施した。「自分がサポートを求める事も勿論ですが、逆に他の先生方がサポートを求めやすい環境や雰囲気作りもしてい

きたい」と行動変容への意欲が向上した教員もいた。

- (c) 第3回「あいさつ」：保護者や同僚に対するあいさつの実践や生徒に対して挨拶の意義の説明などの模擬授業を実施した。「なぜ挨拶をするのか、どのような挨拶をすればよいのか、具体例を挙げながら生徒に語りかけていきたい」という感想があった。
- (d) 第4回「伝える」：話のポイントのまとめ方や伝える際のコツ等についての模擬授業を実施した。「生徒をどんな姿に成長させたいのかが考えられていない」という課題意識が教員の中に芽生えてきた。
- (e) 第5回「面談・聴き方」：担任が実施する生徒、保護者との三者面談の具体的な進め方について模擬面談を実施した。事前録画していた模擬面談の動画を全員で見ながら面談時に気をつけるポイントなどを確認した後、模擬面談を実施した。「三者面談や二者面談などで、形式的な質疑応答のような形を取ってしまいがちだったので、生徒や保護者の考えに寄り添って、話を聴くように意識してみます」というように、今後の三者面談に向けて前向きな姿勢が見られる教員が多かった。
- (e) 第6回「研修の振り返り」：振り返りの時間として、5回の研修を振り返り、自身の成長を感じる場面設定をした。学んだ内容と若年教員自身の生徒に対する指導を振り返ることで、より効果的

表5 研究Ⅱ全体スケジュール

時期	前期実施群	後期実施群	実施内容
5月上旬	○	○	アンケート 1回目
5月14日	○	—	第1回 ストレスマネジメント
5月28日	○	—	第2回 サポート希求
6月11日	○	—	第3回 あいさつ
6月18日	○	—	第4回 伝える
7月2日	○	—	第5回 面談・聴き方
7月13日	○	—	第6回 研修の振り返り
7月下旬	○	○	アンケート 2回目
8月20日	—	○	第1回 ストレスマネジメント
9月1日	—	○	第2回 サポート希求
9月21日	—	○	第3回 あいさつ
10月5日	—	○	第4回 伝える
10月22日	—	○	第5回 面談・聴き方
11月19日	—	○	第6回 研修の振り返り
11月下旬	○	○	アンケート 3回目

○：実施 —：実施せず

表6 研修後のアンケート内容

内容	形式
研修前において「今回の研修内容」を経験したことがありますか。	4件法
研修後の「今回の研修内容」のご自身の理解度はどうでしたか。	5件法
「今回の研修内容」における模擬授業の内容は、今後の「今回の研修内容」能力をはじめとする社会的能力を育成するための授業づくりの参考になりましたか。	5件法
「社会的能力に関連して、日常の学校教育場面で意識しながら実践していること」はありますか。	自由記述
今回学んだ内容を実際に生徒に伝える場面設定が出来るとすれば、どんな場面を想定できますか。(例：SHR、授業の一部、総合の時間など…)	自由記述
この研修で学んだこと・感想・意見・質問等を記入してください。	自由記述

※ 研修ごとに記述する時間を設定した。

な研修となるような工夫をした。「模擬授業についての肯定的なコメントを周りからもらえることがとても良かった」という感想から分かるように、参加者同士での評価の声が大きなポイントになったことが感じられた。じっくりと自身の成長について考えを深める効果的な研修を実施できた。

研修の振り返り

山下・小泉 (2019) を参考に、授業での実践を促し、教員自らの社会的能力を向上させるために、過去の研修内容を振り返るための資料を配付した。その上で、SNS でのやり取りを求めることによる内省を促したり、研修で学んだことをアウトプットした後の生徒の変容に関しての振り返りを促したりするために、他の参加者との意見交換の場を設定した。また、専門性向上のためのネットワーク形成を図るために、研修実施後に、表6のようなアンケートを実施し、聞き取りや授業での実施状況などを確認する機会を設けるようにした。「社会的能力に関連して、日常の学校教育場面で意識しながら実践していること」や実践状況や子どもの変容等についてセッション後のアンケートの中に取り入れて、若年教員に意識的に授業などに取り組んでもらうように4週間に1回程度の働きかけを行った。各自でSHRや授業中に実施した内容を記録用紙に記入して、報告する形にした。研修の振り返りについては、どこが成長したかを具体的に報告者が若年層教員に伝えることで気づきを援助した。もし授業で実施したらどうなるのか、その場で実際に話をしてみても、全員で振り返った。

(3) 結果と考察

若年層高校教員の対生徒関係における社会的能力に関して、前期実施群と後期実施群の(a)(b)(c)の平均値を比較・分析した。(図4～9)

(a) 教職能力についての自己評価：教師用 SEL-8T 尺度の8つの能力について、群(2)×時期(3)の分散分析を行った。「他者への気づき」「基礎的社会的能力」に有意な交互作用がみられた。下位検定を行うと、「他者への気づき」については、前期実施群の2回目と3回目が1回目より高くなっていた。「基礎的社会的能力」については、前期実施群の2回目と3回目が1回目より高く、後期実施群の3回目が1回目と2回目より高くなっていた。どちらの群も、研修後に他者への気づきを中心とする基礎的社会的能力の上昇がみられることから、特に若年層教員自身の視野が広がり、自らの社会的能力が向上したという認識に繋がった可能性がある(図4)。

(b) 生徒による評価：授業アンケートから抜粋し

た3つの質問項目について、群(2)×時期(3)の分散分析を行った。「生徒の活動を促進する工夫」「指導方法全般」に有意な交互作用がみられた。下位検定を行うと、「生徒の活動を促進する工夫」については、前期実施群の2回目と3回目が1回目より高くなっていた。「指導方法全般」についても、前期実施群の2回目と3回目が1回目より高くなっていた(図5)。特に生徒の活動を促進する指導に関して数値の上昇がみられることから、特に若年層教員自身の授業における指導方法の改善の意識が向上し、生徒の評価が上がった可能性がある。

(c) 指導教員による評価：教師用 SEL-8T 尺度の8つの能力について、群(2)×時期(3)の分散分析を行った。「他者への気づき」「基礎的社会的能力」「社会的能力全般」に有意な交互作用がみられた。下位検定を行うと、「他者への気づき」については、前期実施群の2回目が1回目より高く、後期実施群の3回目が1回目と2回目より高くなっていた。「基礎的社会的能力」については、前期実施群の2回目と3回目が1回目より高く、後期実施群の3回目が1回目と2回目より高くなっていた。「社会的能力全般」については、前期実施群の2回目が1回目より高く、後期実施群の3

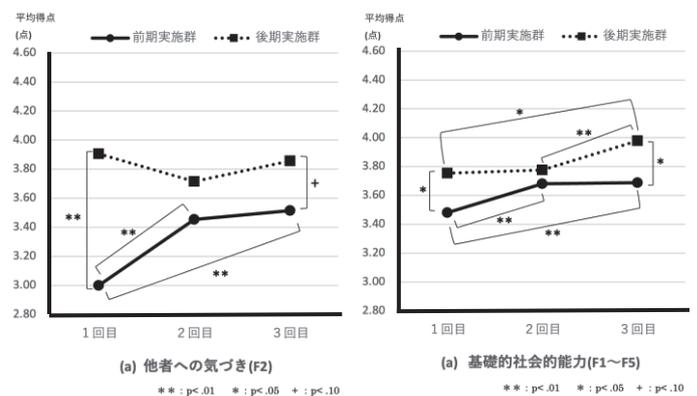


図4 自己評価で有意な交互作用がみられた能力 (抜粋)

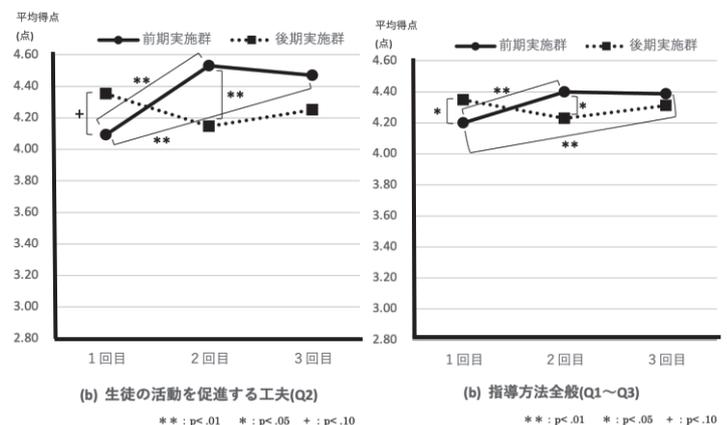


図5 生徒の評価で有意な交互作用がみられた項目 (抜粋)

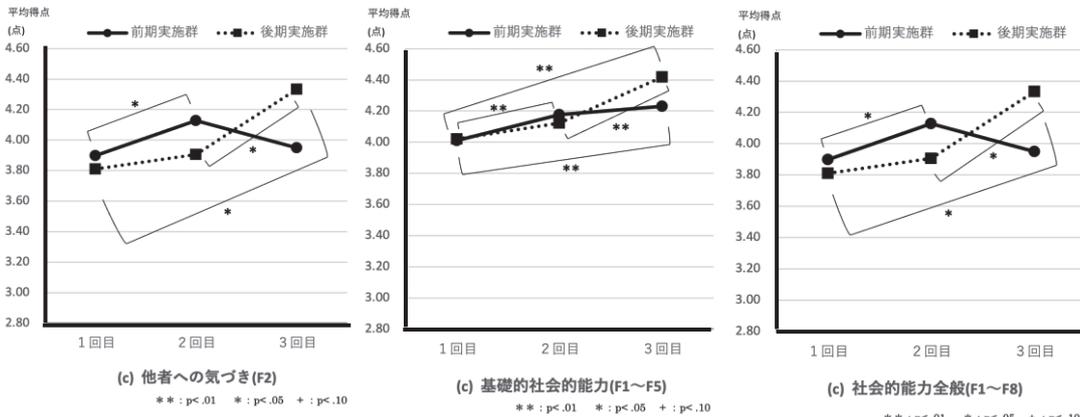


図6 他者評価で有意な交互作用がみられた能力 (抜粋)

回目が1回目と2回目より高くなっていった(図6)。特に「他者への気づき」を中心とする「基礎的社会的能力」の上昇がみられ、指導教員から見て、若年層教員の視野が広がり、職場での振る舞いや対生徒関係において、客観的に見て社会的能力が向上したという認識に繋がった可能性がある。

(d) 研修の振り返り：表7に示すように、研修に対する満足度が高く、生徒に対してアウトプットしようという意欲が感じられる結果となった。

また、図7、図8、図9の結果より、全体の結果として、研修前に比べて研修後の方が数値が向上していることが分かる。

以上の結果より、本研究における研修を実施することで、「他者への気づき」をはじめとする若年教員自身の対生徒関係における社会的能力が向上したという意識が見られ、授業等の指導の過程での指導方法等が変化し、生徒の評価が向上したと考えられる。また、指導教諭をはじめとする同僚教員からの評価も向上し、良い形で研修を進めることができ、研修の成果を示すことができたと考えられる。

(4) 研究Ⅱの成果と課題

対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる若年教員研修プログラムを策定し、約20

表7 研修後の参加者アンケートの記述内容

- この6回で学んだことを自分の能力として使えるように、また、効果的に使えるように今後もアウトプットを続けていきたいです。
- ストレスマネジメントやサポート希求など実際に生徒が悩みそうなことを先回りして解決方法を提示することができるようになった。
- 担任としてクラスを受け持ったことがないが、今後クラス運営をする上でどのように生徒や保護者と対応すべきか考えて行動していきたい。
- これまで、このような定期的な研修を受けることが無かったが、自分の成長に繋がったことに加えて、他の先生方の意見の共有ができ、本当によかったです。
- 研修で学んだことをホームルーム時に伝えることができた。
- 模擬授業についての肯定的なコメントを周りからもらえることがとても良かった。
- 研修を受ける前に比べて自分の考えを話すことが出来るようになった。

名に試行することができた。研修後のアンケート結果(表7)の前期実施群は第2回目、後期実施群は第3回目の自己評価が上昇していることから分かるように、研修後に対生徒関係に関

しての意識の向上が見られ、生徒への講話や授業の中に研修内容を取り入れていこうとする意識が見られるようになった。このことから、参加した若年層教員はSEL-8Tの効果を感じており、今後の活用への意欲も高いことが推察される。まだ2校のみの実施であることから、今後は県内の

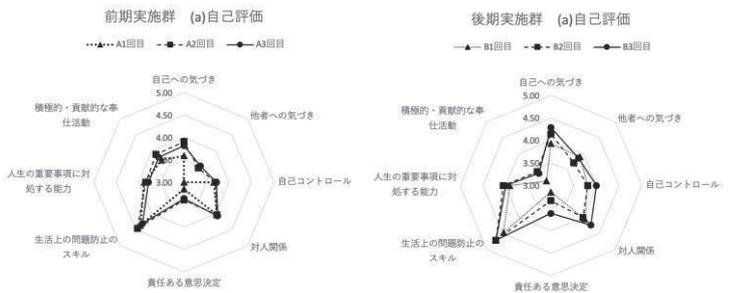


図7 自己評価の変化

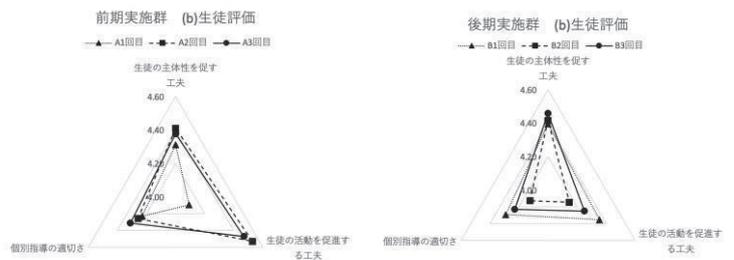


図8 生徒による評価の変化

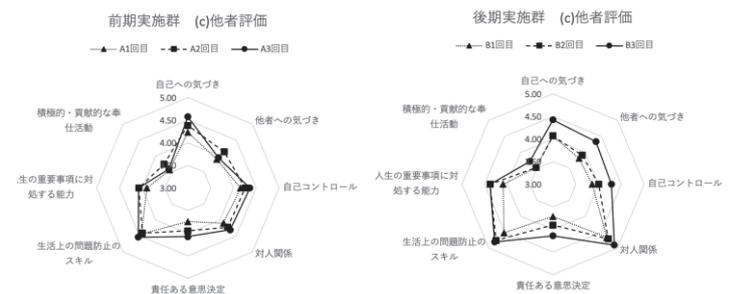


図9 指導教員による評価の変化

他校における若年教員研修の一部として組み込むことができるよう、改善を進めていきたい。それとともに、若年教員の指導力向上に向けて、校内だけでなく学校を越えての若年教員の相互交流を進めるためにミーティングの機会を設定するなどのフォローアップを充実させていく。

4 まとめと総合考察

本研究では、対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる研修プログラムの効果を検証し、高等学校の若年教員研修で利用できる研修の手引きを作成することを目標とした。主に若年層教員に SEL-8T を組み込んだプログラムを策定し、若年教員にとって、対生徒関係において必要不可欠な社会的能力の育成をテーマとした研修を実施し、その研修の成果をまとめることで、研修の手引きを作成することができた。研究Ⅰでは、対生徒関係における社会的能力を伸ばすことのできる若年教員研修プログラムを策定し、初任者3名に試行することができた。自己評価、他者評価の結果から、若年層教員の社会的能力を向上させるための一助となった可能性が考えられた。研究Ⅱでは、研修プログラムを改訂し、約20名の若年層教員に実施することができた。「他者への気づき」をはじめとする対生徒関係における社会的能力が向上したという意識が見られ、授業等の指導の過程での指導方法や生徒への接し方等が変化し、生徒の評価や指導教員からの評価も向上した。また、以上の研修内容を手引きとしてまとめることができた。

現在、県立学校等の若年教員研修においては、指導の手引きはあるものの、対生徒関係などの具体的な指導に関しては、各高校の担当教員に委ねられている部分が多く、担当教員の負担が大きい。しかし、本研究で作成した研修の手引きを活用することで、現場での教員の負担軽減が図れるとともに、対生徒関係における社会的能力育成に貢献できる可能性が高い。

長谷川・菅野(2019)は、教職という仕事を遂行するための資質能力が画一化されるだけでなく、教職能力の多様性の尊重が保障される仕組みでなければならないと述べており、教員を育成するに当たっては、現場に即した形でより実践的な研修が必要とされている。また、北川(2019)は、安心して生徒の前に立てるように、事前に、授業等を自分でやってみるスタイルで指導をすることで教員の不安が解消され、研修の成果が高まったこ

とを示している。このことから、本研究が若年教員研修のスタイルとして、適切な形式で研修を実施できていると言える。

小泉ら(2017)は、教員自身の社会的能力向上を図るプログラムを実施することが、生徒の社会的能力向上を図ることにつながり、教育効果を高めることができると述べている。本研究の SEL-8T の実践が若年教員の社会的能力の向上につながり、最終的には生徒の社会的能力向上に貢献できる可能性が示唆された。自己評価だけではなく、指導教員による他者評価、生徒からの評価も向上しており、若年教員が自信を深め、研修の成果を生徒の前でも示すことにつながったと考えられる。この研修でのディスカッションや模擬指導は直接的に対生徒関係の具体的な教育場面で活かすことができるため、本研究の意義は大きい。取り組みの効果が高まると言える。本研究での若年教員に対する研修の手法が広まり、教員の社会的能力が向上するような研修が再構築されて、高校教育の更なる発展につながることを強く望んでいる。

主な引用・参考文献

- 北川裕子(2019) 初任者研修における指導の工夫 福島大学人間発達文化学類論集, 29, 17-24
- 小泉令三(2014) 教職志望学生のための社会性と情動の学習(SEL-8T)の提案 福岡教育大学紀要, 63(第4分冊), 157-165
- 小泉令三・山田洋平(2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 社会性と情動の学習の進め方3 中学校編 ミネルヴァ書房
- 小泉令三・山田洋平・大坪靖直(2017) 教師のための社会性と情動の学習(SEL-8T)-人との豊かなかかわりを築く14のテーマ- ミネルヴァ書房
- 長谷川哲也・菅野文彦(2019) 教員養成改革下における「教員養成スタンダード」策定の意義と課題-静岡大学教育学部を事例として- 静岡大学教育実践総合センター紀要, 29, 26-36
- 山田洋平・小泉令三・高松勝也(2014) 教師用社会性と情動尺度の開発 日本心理学会第78回大会発表論文集 1180
- 山下健・小泉令三(2019) 若年層教員の対児童関係における社会的能力向上の取組-小グループによる研修プログラムの実践- 日本学校心理士会年報, 11, 83-94

謝辞

本研究に際し、機会を提供して下さった福岡県教育委員会をはじめ、協力していただいた全ての先生方、アンケート等に協力していただいた全ての生徒に、心より感謝申し上げます。